



TITLE:

ルカ・ジョルダーノの「作風」模倣—17世紀後半イタリアにおける趣味をめぐって(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

小松, 浩之

CITATION:

小松, 浩之. ルカ・ジョルダーノの「作風」模倣—17世紀後半イタリアにおける趣味をめぐって. 京都大学, 2020, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22528>

RIGHT:

許諾条件により本文は2021-03-22に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	小松 浩之
論文題目	ルカ・ジョルダーノの「作風」模倣 ——17世紀後半イタリアにおける趣味をめぐって		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、17世紀のナポリを代表するバロックの画家ルカ・ジョルダーノ（1634-1705年）を、その「作風maniera」模倣という切り口から論じるものである。この画家は当時から、いにしえの巨匠たち——ティツィアーノ、ティントレット、ルーベンス、ジュゼッペ・デ・リベラなど——の「作風」を模倣する技量の高さで名を馳せ、ナポリを統治していたスペインの王室やヴェネツィアの貴族たちから好んで登用され盛んに注文依頼を受けていたが、本論文は、そうした画家の特異な活動を、作品や伝記という美術史的観点からはもちろん、市場と価格、流通と収集をめぐる文化的・経済的な状況、さらに同時代の芸術論や美的趣味という美学的な観点から総合的に考察することを試みている。</p> <p>「はじめに」と「おわりに」には含まれた本文は三部構成で、各部のタイトルは順に、「「作風」模倣の神話」、「贋作とパスティーシュのあいだ」、「「作風」模倣の期待の地平」で、各部はそれぞれ二つずつの章（全六章）からなる。まず「はじめに」において、先行研究等を批判的に検討しながら、「作風」と「様式style」とを区別し、前者を「主題や構図、色彩、明暗、人物像の姿勢、図像学も含む、比較的にゆるやかな概念」と規定したうえで、具体的な検証に入っていく。</p> <p>第一章では、17世紀の芸術論や画家の伝記記述等（手稿や版による差異も含めて）を詳細に解説・分析することで、この画家が、とりわけルネサンスの巨匠たちの「手法によるa maniera di」作品の制作に長けていたことが、むしろ積極的に評価されていたという事実が跡づけられる。しかし、それは同時にいわゆる「贋作」とも踵を接することになるが、第二章では、実際にそうした事例が、貴重な伝記草稿などに基づいて詳しく分析・検討される。ここで明らかとなるのは、オランダからナポリに移住した改宗ユダヤ人（コンベルソ）の大商人ガスパル・デ・ローメルが存在である。このフランドル商人は大量のジョルダーノ作品を所有し、王族や貴族のコレクターたちとの代理人ないし仲介役を果たしていたが、ここから導き出されるのは、「贋作」は必ずしも一方的に非難されたわけではないこと、画家のすぐれた腕前を証明するものとみなされることも多かったこと、さらに「からかいburletta」や「戯れtiro」という当時の用語にも表われているような、一種のゲーム感覚で楽しまれていたという受容形態である。</p> <p>つづく第三章では、前節で触れられたローメルのコレクションの消息がさらに詳しく検討されていく。まず確認されるのは用語の問題である。たとえば「贋作」はイタリア語で動詞contraffareの名詞形でcontraffazioneと呼ばれるが、この語は当時において、必ず</p>			

しも「偽false」を含意するものではなくて、むしろ「写生」や「模倣」を意味していた。さらに当時の一時資料を丹念に読み解きながら、今日的な意味での贋作とは異なる受容環境があったこと、たとえば、目利きの目を欺くことで卓越した模倣家としての称賛を受けること、あるいは、たとえペテンが露見したとしても、画家の深い見識と高い技量を証明する絶好の機会となっていたことなど、興味深い事例がたどられていく。さらに第四章では、そうした流通や需要の環境において、ローメルを筆頭に、ナポリやヴェネツィアなどに居を構えた改宗ユダヤ人の大商人たちの「国際的ネットワーク」が大きな役割を果たしていたことが、残された取引の記録（そのなかには、論者自身がナポリ銀行歴史文書館で発見した、ルカ・ジョルダーノへの支払い記録にかんする新出資料も含まれ、書き起こされて資料として巻末に添付されている）の分析によって解明されていく。

これを受けて第五章では、スペイン貴族の所有になっていたと想定される現プラド美術館像の《平和の寓意を描くルーベンス》が、最後の第六章では、ヴェネツィアのサンタ・マリア・デッラ・サルUTE聖堂に今も残る三枚の祭壇画が、図像学的な観点も交えて詳細に分析される。前者は、カンヴァスに向かう制作中のルーベンスの肖像を、そのルーベンス本人を想起させる「作風」で描いた大作で、従来は、外交官でもあったルーベンスの政治的業績を顕彰するものとみなされてきたが、本論文では、寓意性やメタ絵画性——ルーベンスが絵を描くところをルーベンス風に描く——にむしろ注目することで新たな解釈を提示している。一方ヴェネツィアの三作品の分析から明らかになるのは、斜陽化をたどるこの海運国が、繁栄を誇ったいにしへの画家たちの「作風」を再現できるジョルダーノの作品に「共同体の栄光の面影」を求め、画家も見事にそれに応えてみせたという点である。

(論文審査の結果の要旨)

17世紀のナポリの画家ルカ・ジョルダーノは、当時から、いにしえの巨匠たち——ラファエッロ、アルブレヒト・デューラー、ティツィアーノ、ティントレット、ルーベンス、ジュゼッペ・デ・リベラなど——の「作風maniera」を模倣する多彩な技量の高さで名を馳せ、ナポリを統治していたスペインの王室・貴族やヴェネツィアの貴族たちから好んで登用され盛んに注文依頼を受けていたほどの、バロック期イタリアを代表する画家のひとりであるが、それにもかかわらず、少なくとも日本では本格的な研究の対象となることはなかった。本論文は、そうした画家の特異な活動を、作品や伝記の観点からはもちろん、市場と価格、流通と収集をめぐる文化的・経済的な状況、さらに同時代の芸術論や美的趣味の観点から総合的に考察することを試みた、本邦初の成果である。

本論文の特筆すべきオリジナルな貢献は次の二点に要約される。まず第一に、過去の画家たちの「作風」の模倣をむしろ肯定的に受け入れ、画家ジョルダーノにそれを期待すらしていた、当時の王侯・貴族の顧客たちのコレクションの状況を鮮やかに浮かび上がらせた点。次に、これまでとは異なる作品解釈——とりわけ顕著な一例を挙げるなら、現プラド美術館所蔵の大作《平和の寓意を描くルーベンス》（1660年頃、337 x 414cm）に関連して——を提示して見せている点、である。

まず前者から述べるなら、この画家の手法は現代のわたしたちから見ると、いわゆる「贋作」に限りなく近づくように思われるかもしれない。だが論者によると、それはむしろ、芸術に新しさや独創性のみを求めようとする現代人の狭い考え方に過ぎない。実際にも、「贋作」はイタリア語で、動詞contraffareの名詞形でcontraffazioneと呼ばれるが、この語は当時において、必ずしも「偽falso」を含意するものではなくて、むしろ「写生」や「模倣」を意味していたことが、17世紀の芸術論などから跡付けられる。また、当時の幾つかの伝記においても、この画家が、とりわけルネサンスの巨匠たちの「手法によるa maniera di」作品の制作に長けていたことが積極的に評価され、最上のものを選び抜き組み合わせて「アイデア」を表現できるその能力において、古代ギリシアの伝説的な画家ゼウクシスにも比肩されていたことがたどられる。それゆえ、たとえ過去の巨匠の「模倣」であることが露呈したとしても、それを描いた画家の深い見識と卓越した技術を称賛するような独特の絵の見方があったことが、一次資料から裏付けられるのである。

また、こうした受容環境において大きな役割を果たしていたのが、改宗ユダヤ

人（コンベルソ）の大商人たちの存在であったことが、本論文では強調されている。具体的には、フランドルからイタリアに渡ってきたナポリ在住のガスパル・デ・ローメルや、ポルトガル出身のヴェネツィアの貿易商アゴスティーノ・フォンセカがそれで、彼らは、大コレクターである王侯・貴族の顧客たちと画家とをつなぐ重要な仲介役や代理人となっていたという。その注文や交渉や価格等を記したドキュメントの分析は、本論文の重要な部分をなすが、そのなかには、論者自身がナポリ銀行歴史文書館で発見した、ルカ・ジョルダーノへの支払い記録にかんする新出資料も含まれ、書き起こされて資料として巻末に添付されている。これもまた、本論文の特筆すべき成果のひとつである。

さらに先行研究では、ジョルダーノによる「作風」模倣の作品は、「贋作」ではないとする立場と、「贋作」とみなす立場に二分されてきたという経緯があるが、論者は、上述したような受容環境を等閑に付して作品の特徴のみからどちらかに判断することは片手落ちであると指摘する。いわく、「作品が贋作となるか模倣の妙技となるかは作品の質や画家の意図の問題ではなく、制作者を見きわめる鑑識眼をもつか、来歴と帰属をよく知る観者の判断の問題と言えるだろう」、と。この結論は一定の説得力をもっている。

次に、新たな作品解釈についていうなら、《平和の寓意を描くルーベンス》は、カンヴァスに向かう制作中のルーベンスの肖像を、そのルーベンス本人を想起させる「作風」で描いた大作であるが、従来は、名高い外交官でもあったルーベンスの政治的業績を顕彰するものとみなされてきた。しかし本論文では、その絵のなかに込められた複雑な神話的寓意性を読み込みつつ、ルーベンスが絵を描くところをルーベンス風に描くというメタ絵画的な性格に本作の特徴を見いだそうとしている。ここにもまた、巨匠の特定の作品を模写するのではなく、複数の作品を念頭に置きながらその「作風」を見るものに喚起させるという、ジョルダーノ特有の才能が発揮されているわけである。このことは、ティツィアーノ風やティントレット風に描いたヴェネツィアの顧客向けの作品にも当てはまる。こうすることで画家は、過去の巨匠にオマージュを捧げると同時に、過去の栄光へのノスタルジックな願望にも応えている、と結論づけられる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降